

1382

臺灣内地間及臺灣沿岸現行定期航海命令書

1383

供覽
次官

總理局

人事課

軍務局

軍令部

次

第三課長

臺灣第三六號

臺灣内地日及台灣沿岸現行之期航海會
令書繼續、付之關之、紙之通日奉郵船大政
商船、支株、或之社會、請各提出、及、付、以
參、考、之、等、進、行、也

明治三十四年四月廿百

臺灣總督府海軍參謀長黑島吉

海軍次官男爵伊藤藤島吉

名倉



第一局

第二局

吉松

海

軍

御清書

現行定期航海命令其全部より昭徳三年四月
月一日より今年六月三十日まで三月間繼續ノ義
由命令其申付テ在命令其之掲久ノ要
件ヲ履行シ聊カ不都合無ク御用取致可
申

右御清書付申

昭徳三年三月三十日

昇郵船株式會社社長 長尾

佐藤 勝之助

其清書ヲ男爵兒玉源右郎殿

御返書

現行の期航海年令より未四月一日より六月三
十日までの月台継続ノ義以年令ノ上年令
其付則並發着表若老運貨表使用船
此現行の通太期台應り之者以通道在
本年より台不取左冬し以用五勅可申
右以渡付之知

明治三十四年三月三十日

日本郵船株式會社基隆出張所

近藤勝之助

民政局長後藤新平殿

御受書

大阪商船株式會社

明治三十年七月九日付民通第六六一號ヲ以テ其社ニ交付シタル現行定期航海庫券書全部ヲ明治三十一年四月一日ヨリ同年六月三十日マテ三箇月間繼續ス

明治三十一年三月二十八日

臺灣總督男爵兒玉源太郎

右謹テ御使仕至也

明治三十一年四月一日

大阪商船株式會社

社長 田中 市兵衛

御 受 書

大阪商船株式會社

今般現行定期航海年令書ハ四月一日ヨリ
六月三十日ヨリ三箇月間繼續ノ義年令相
成矣三付テハ年令書附則第百門司間ハ
瀬戸内航路定期船接續ノ件並寢着表
荷居運賃表使用船共現行ノ通右期間
履行スベシ

明治三十一年三月二十八日

臺灣總督府民政局長後藤新平

右謹テ御受任至也

大阪商船株式會社

明治三十一年四月一日 社長 田中兵衛

1388

軍務局

供覽

次官

主總理局

軍令部

次長

第一局

第二局

三九号

臺灣海防一三號ノ二

軍事課

送達

日本郵船株式會社及大阪商船株式會社ノ令狀
總督より下附相成リタル命令高別括之通ニシテ送達
送達 快や

明治三十一年七月十日

臺灣總督府海軍參謀長 黒岡 常



海軍大臣 侯爵 西郷 從道 殿
海軍軍令部長 子爵 伊東 祐亨 殿

海

軍

命令書

日本郵船株式會社

第一條

臺灣總督府、臺灣、澎湖、内地間、航
行、運輸、交通、利便、之、因、力、為、其、社、左
、臣、期、航、海、ヲ、為、ス、ト、シ、テ、命、ス、

一 基隆より門司、神戸、長崎、此路、毎月二回以上

第二條

第一條、此路、用、汽、船、其、船、名、

船、名、船、長、公、務、局、長、船、長、運、轉、士、機、關、士、
姓、名、職、名、并、其、已、下、各、船、員、之、後、務、員、名、

ヲ、記、す、運、送、總、務、所、認、可、シ、タ、ル、ノ、後、之、

各、項、之、汽、船、者、之、要、件、ヲ、具、付、ス、ル、事、ニ、

一 船、体、造、成、後、圖、并、附、屬、品、ト、シ、テ、長、崎、之、
港、面、積、官、吏、之、ヲ、点、検、ス、本、航、路、之、航、行、

老上退の七ノ下

二 徳教二年五月朔午始速方中海宮三上老下

第三條 丹波路之用之遺教之開業免許

爰有元醫師一五ノ乘世也

第一條 丹波路之遺教之本既結之用之遺教

對之取道之法既結之

律之既結之其意之志之

云云

爰有元醫師一五ノ乘世也

後之其着者

可也

ノ余

ノ其

スレ但直送送、因ス規程、を渡銀付
別之ソ空ム

芽の条 旅客各物、運賃、控ノ其額

ヲ空ム、を渡銀付、可シクモ、但直

業上、状況、依リ、可シクモ、運賃、

管内、之ヲ、控スル、所ナシ

第九條 急送銀付、臨時、運賃、

此、其、年、令、運、行、ル、ヤ、左、ノ、換、金、セ

シムルコトナレシ

第十條 急送銀付、本、院、終、ノ、對、於、海

補助金トシテ、明治、三、十、年、七、月、一、日、ヨリ、三、十、二

年、三、月、三、十、一、日、ニ、至、ル、一、箇、年、間、金、貳、万、六、千、〇

六、百、四、十、五、圓、ノ、其、金、付、下、付、ス

并項神助金額ハ之ツ九分ト更亦自
有ツ翌月十五日ヨリ、支限ス

第一案 右記此ノ用ニ注以テ採裁セ

ル茲案、員數比出、種類并個數

差、明點ヲ各簿總持府ニ於テ之ニ一

目、様式ニ依テ取調一返海終了毎

ニ其社是處支店ニテ直ニ巻理總持

府ニ報告スヘシ

第二案 會社ノ身設費ニ於テ是ニ業上

召致ノ案出テ調査ニ三箇月毎ニ巻

理總持府ニ報告スヘシ

第三案 會社ノ於テ巨款、多項ノ事業

ニ於テ其ノ巻理總持府ニ提出スヘシ

等千五名 多達 終替之 会社 本支店 代理
 店 長 院 取 取 外 年 長 条 件 青 道 替
 一 九 零 一 年 八 月 十 日 迄 合 十 年 其 出 借 之 依
 一 度 毎 之 厘 五 百 圓 以 内 迄 迄 金 十 五 圓
 迄 不 可 但 合 社 之 取 外 年 長 条 件 青 道
 替 不 可 卜 屢 之 一 十 年 迄 終 替 之 依 定 期
 既 海 北 之 不 通 通 者 卜 取 外 十 年 其 事 由 之
 明 示 之 命 命 之 委 委 之 不 解 除 之 下 了 之
 等 千 五 名 其 年 長 有 効 期 限 之 明 示 三 十 年
 七 月 一 日 以 右 三 十 年 三 月 三 十 日 迄 了 之
 命 命 不 可

明治三十二年六月三十日

臺灣通商銀行 理事 見 玉 源 夫 郎

命令書

大坂商船株式會社

第一條 日本海總督府、日本海、内地間、及
 為其會社、左、定期航路、及、利益、之、圖、ル、カ
 第一 基隆ヨリ長崎門司宇品ヲ經テ神戶
 二 至ル航路、每月、往復、三回、以上、基隆ヨリ門司
 ヲ經テ神戶ニ至ル航路、每月、往復、二回、以上
 第三 基隆ヨリ神戶三角門司ヲ經テ神戶ニ
 至ル航路、每月、往復、一回、以上
 第四 基隆ヨリ神戶名瀬、康恩、島ヲ經テ神
 戶ニ至ル航路、每月、往復、一回、以上
 第五 基隆ヨリ八重山、神戶、康恩、島ヲ經テ

神戶至三河航路毎月往復一回以上

第五基隆ヨリ種理花蓮港鼻南南津車

城打物至津濱湖島蓬首宿尾ヲ經テ基隆

二回航スル航路毎月往復一回以上及基隆ヨリ

蓬首宿尾湖島安平打物車城南津車

南花蓮港後津ヨリ經テ基隆ニ回航スル航

路毎月往復一回以上但シ蓬首宿尾ハ、寄港ト

九月十五日ヨリ四月廿日マデハ天候ノ模様ニ依リ

寄港セザルカ

第六基隆ヨリ湖島安平ヲ經テ打物ニ至ル

航路毎月往復二回以上

但シ本規程ノ航路運費ヲ減セザル限リハ數航路

ヲ併セテ一航路ト爲ルコトヲ得又第五項第六

項ノ航路ハ目的港ニ到達スルモ風波ノ為貨客
ノ揚々却レリナシ能ハサルトキハ次港ニ航行スル
エトヲ得

第三條 第一條ノ各航路ニ用ナル汽船ハ其船名船
質船齡噸數公稱馬力船長運轉士機士
ノ姓名職名証其以下各船員ノ職稱員數ヲ
記シ且臺灣總督府ノ認可ヲ受クベシ

前項ノ汽船ハ左ノ要件ヲ具備スルヲ要ス

一 船体汽機ノ固結付属品トモ良好ニシテ老練

官吏之ヲ點檢シ本航路ニ使用ニ適宜ト認ル

モノナルヲ

二 第一條第一項ノ航路ニ用ナル汽船ハ總噸數

二千五百噸以上第一項ノ航路及第二項ノ

航路之用凡汽船ハ總噸數千五百噸以上者
五項第六項ノ航路ニ用ル汽船ハ總噸數
千二百噸以上トシテ平均速力格海里以上トモ
ナラント

第三條 航客ノ病者ヲ点檢スル為基隆港ニ開

業急状ヲ受有スル醫所一名以上ヲ置キ業ヲ

業商ヲ設置シ流行病アルニ際シテ基隆港總

督ノ命ニ依リ各船ニ醫所一名ヲ乗組セシムベシ

第四條 臺灣總督ハ第一條ノ航路ニ用ル汽

船ニ對シ航海ノ狀況ニ依リ又ハ政府ノ命令ニ依リ航

路ヲ變更スル權クハ寄港地ヲ指定スルモノアルベシ

第五條 第一條ノ各航路ニ因リル汽船ノ出帆定

日ハ總督ノ告示ニ依リ制定シ且各航路ニ對シテ可

受クベシ祖シ航海ノ状況ニ依リ其ノ
ニ至ルヤルベシ此場在ニ放テ有ル
之ヲ拒絶スルコトヲ許サズ

第六條 第一條ノ若ク船體ニ用テ
埋テヘカラサント至リタルトキ又ハ船體機関ノ修理ヲ
要ス定期ノ日時ニ出港ニ能ハサルトキハ速ニ其
任ニ適任トシテ他船ヲ以テ之ヲ補充スル事ハ總
督ノ認可ニ受クベシ

前項ノ場有其他不得止事^故ニ依リ定期ノ日
時ニ出帆ニ能ハサルトキハ速ニ出港地ノ郵便局
ニ通報スル事一經第一項ノ第五項ノ事ニ
用テル汽船花トキハ陸軍運輸部駐地支
部ハモ亦通報スベシ

前項、揚子江に於て定期ノ日時ヨリ起算シ十時
 間以上ノ延滞ハ要スルキハ其事由ヨリ其延滞
 者存之而出ヘシ但花邊港身南及南湾へ
 寄港スルキハ此限ニテス

第七條 第一條ノ各航路ニ用ル汽船ハ郵便物
 小倉郵便物及郵便器具ヲ其貨物ニテ運送ス
 ヘシ但之其運送ノ関スル規程ハ臺灣總督
 別ノ之ヲ定ム

第八條 旅客貨物運賃ハ條ノ其額ヲ定ム
 且運賃無情ノ認可ヲ受ケ入ヘシ但之商業上ノ狀
 況ニ依リ認可シタル運賃額ノ範圍内ニ於テ
 之輕減スルハ妨ケナシ

第九條 第一條第一項第五項第六項ノ航路

用ルル汽船ハ老宿屋ノ事敷(第一項ノ航路ニ使甲ニル
汽船ニテ上等宿屋ヲ充テル時ハ四分)及老船ノ養修費
以テトキハ八人ノ公費五項第一項ノ航路
ニ使甲ニル汽船ニテ上等宿屋ヲ充テル時ハ四分)
噸數ニ分テ航路ノ陸軍用ニ使スベシ但シ陸軍用航
路ニ使甲ニルトキハ會社ノ陸軍運轉部該地ニ
部ノ許可ヲ得テ使用スルヲ得

前項貨物ヲ振載スル航路ノ人員ヨリ多載セシム
ルコトアルベシ此場左ノ航路ノ會社ノ其費用ヲ以テ
相當ノ標準ヲ為スルコトス

第一條 第一條第一項第一項及第六項ノ航路ニ用
ルル汽船ハ前各條ノ外左諸項ヲ遵守スルコトス

又

第一條 臺灣陸軍補給廠ノ事業ニ際シ遠征軍
事務運送ノ必要ヲ生シタルトキハ定期ノ日時及航

航路ヲ変更スル者ハ寄港地ヲ指示スルコトヲ
凡ソシ

第二陸軍ノ命令ヲ以テ乗船スル軍人軍属ノ員
既家族在臺漢軍隊ニ属スル酒保商人(但
酒保進運品ノ管領者一兩人に限ル)ノ食料ニ一
食ハ錢ノ割合ヲ以テ其儘ノ食料食料ニ依テ
シ其実費ハ軍人軍属ニシテ單獨者ニテハ
陸軍運輸部字品支那ノ軍隊ニテリケル上陸ノ
際其軍隊ニ其他ノ者ニテリケル者自本人ノ其実
費ヲ請求スルコト

第三臺灣陸軍補給廠ハ必要ノ應ニ監督官
及衛生員ヲ乘組セシムルコトアルニ此場合ニ於
テ監督官及衛生員ノ其職務上必要ナル

項ヲ要求スルトキハ船長ハ為シ得ヘキ限リ程
度ニ於テ其要求ニ應ズルニ

第四臺灣陸軍補給廠ハ船内取係組織生上
必要ト認ルルニ之ニ関スル規則ヲ該ラ會社
及乘組員ヲレキ之ヲ遵行セシムル事アルニ

第五惡疫又ハ火災依防規則船内取係等

ニ關シ臺灣陸軍補給廠ハ該ラ規定ニ
ハ船長ハ該ラ會社上乗客一般ニ履行セシムル
ニ

第十一條臺灣總督府ハ臨時検査官ヲ派出シ
此検査官ヲ遵行スルニ各ラ検査官ニ付テハ

第十三條臺灣總督府ハ第一條ノ航路ニ對シ航

第十五條 會社於此等定款、條項ヲ變更シタルトキハ
直ニ臺灣總督府ニ届出ツベシ

第十六條 臺灣總督ハ會社本支店代理店若シテ
汽船ノ航行此會社ノ條件ニ違背シタル事業實アリト
認ルルニキハ其情狀ニ依リ一ニ是等事業ニ否圖江
違扈謝令ヲ繼收スルニ但會社於此會社ノ條
件ニ違背スルニキハ臺灣總督ハ會社
定期航海ヲ托スルニ不適宜ト認ルルニキハ其事業
由ニ明示シ此會社ノ變更又ハ解除スルニキハ
凡ソシ

第十七條 此命令、有効期限ハ明治三十一年七月

廿一日ヨリ同三十三年三月三十一日ニテテトス

右命令令又

1406

明治三十五年六月三日
臺灣總督里爵兒玉源太郎